

中年期の自我同一性に関する研究の展望 (I)

名島潤慈*・原田則代**・井田博子***

A Perspective of Middle-aged Ego Identity Research (I)

Junji NAJIMA, Noriyo HARADA and Hiroko IDA

(Received May 23, 1994)

Attention to adulthood is a relatively recent phenomenon in psychoanalysis as well as other areas. From the point of view of Sigmund Freud's drive-theory there was little need to consider later experiences, and the concept of the repetition compulsion led to a further devaluing of the role of later reality in the shaping of personality. However, both Carl Gustav Jung and Erik Homburger Erikson emphasized unique existential and psychosocial characteristics of middle adulthood. This paper contains a review of literature covering a summary of Erikson's psychosocial crisis in adulthood, and some recent research studies on ego identity in middle years.

L'attention à l'âge adulte est un phénomène relativement récent dans le domaine psychanalytique comme dans les autres. Au point de vue de la théorie de la pulsion (Treib Theorie), proposée par Sigmund Freud, il n'y avait guère de nécessité de considérer des expériences des périodes postérieures, et le concept de la compulsion de la répétition a extrêmement dévalué encore le rôle de la réalité des expériences ultérieures dans la formation de la personnalité. Mais cependant, Carl Gustav Jung et Erik Homburger Erikson ont insisté sur les caractéristiques existentielles et psycho-sociales de l'âge moyen. Ce mémoire contient une revue de la littérature qui couvre un résumé des idées d'Erikson à propos de la crise psycho-sociale en âge adulte, et quelques recherches récentes pour l'étude concernant l'identité du moi en âge moyen.

Key words : ego identity, middle years, psychoanalysis

I 本稿のねらい

精神分析家の Erik Homburger Erikson (1902-1994) が自我同一性概念 (Erikson, 1950, 1959) を提出して以来, これまで同一性について数多くの研究がなされてきた。例えば、『自我同一性研究の展望』(鑑他編, 1984)では, 1950年から1981年の間に発表された英語論文1140編, 日本語論文87編が取り上げられている。ただ, 同一性に関する理論的検討を除けば, これらの論文の多くは思春期と青年期を対象としたものである。われわれもまた, これまで, 日本における同一性研究の展望や, 大学生の同一性の様態に関する研究, 青年期の同一性危機事例の検討などを行ってきた(鑑・名島・山本, 1978; 鑑他, 1979; 山本他, 1979; 武則他, 1979; 名島, 1981,

* 熊本大学教育学部心理学教室

** 熊本大学大学院教育学研究科

*** 熊本大学大学院科目等履修生(玉名病院)

1989).

ところで、同一性の研究が思春期・青年期に集中したことには、もちろん理由がある。同一性概念の提唱者である Erikson 自身が、同一性の形成・確立を青年期における発達課題としたからである。また、同一性の確立の反対概念である同一性拡散症候群 (identity diffusion syndrome) も、16 歳から 24 歳までの境界例患者たちとの治療的関りから生まれたものであった (Erikson, 1959)。

しかしながら、同一性の形成・確立・成熟は、青年期において完了するわけではけっしてない。既に Erikson 自身、人間の同一性の形成と成熟は、「自己の肯定的同一性 (positive identity) と否定的同一性 (negative identity) との、生涯続く弁証法的なプロセスであり、相互作用である」「真の同一性形成は、青年期に特別の危機を孕む一つの永続的なプロセスである」と述べている (Newton との対話における Erikson の言葉, Erikson & Newton, 1973)。このように見てくると、同一性は青年期において、特に同一性の危機 (同一性拡散や同一性葛藤) という形で鮮明に顕在化するが、同じことは成人期や老人期についてもあてはまることになる。

ところで、成人期 (adulthood) の年齢区分はむづかしい。国により、人によってまちまちであるし、また、何を基準にして考えるかによっても異なってくる。例えば、岡堂 (1983) は、21 歳頃から 40 歳までを「成人初期」、41 歳から 60 歳までを「壮年期」と呼んでいる。また、Levinson et al. (1978) は、17 歳から 45 歳までを成人初期、40 歳から 65 歳までを中年期としている (40 歳から 45 歳は中年への過渡期、60 歳から 65 歳は老年への過渡期である)。さらに、Newman & Newman (1975) は、23 歳から 30 歳を成人前期 (early adulthood)、31 歳から 50 歳を成人中期 (middle adulthood)、51 歳以上を成人後期 (later adulthood) とし、その後彼らは、23 歳から 34 歳を成人前期、35 歳から 60 歳を成人中期、61 歳以上を成人後期と改めている (Newman & Newman, 1984)。

このように、(広義の)成人期は初期成人期から初老期、つまり 20 歳代から 60 歳代までの広い範囲を含んでいる。そこで、本稿では、成人期を成人期前期・成人期中期・成人期後期の三つに区分し、展望の焦点を成人期中期、つまり中年期 (middle years, middle age) に絞り、範囲を 40 歳前後、つまり 30 歳代から 50 歳代あたりまでに限定したい。

40 歳前後は丁度人生の折り返し点である。と同時に、「中年期の危機 (middle age crisis)」「人生半ばの危機 (mid-life crisis) (Die Krise in der Mitte des Lebens)」「人生行路上の危機 (Die Krise auf dem Lebensweg)」といった言葉からも窺えるように、内外共に変動の激しい年代でもある。精神医学的にも、臨床心理学的にも、精神分析的にも問題が多い (飯田編, 1990; 名島, 1984; Mann, 1985)。ただし、個人差があり、人によれば、中年期は危機の時期というよりも、平穏な時期であったり、活力と生産性が増大する時期であったりする。

中年期 (成人期中期) の研究は、Jung (1931, 1943) の先駆け的なものを除けば、1950・1960 年代から開始されている (Gross Ed., 1956; Soddy, 1967; Owen Ed., 1967; Bühler & Massarik Eds., 1968; Neugarten Ed., 1968)。しかし、中年期が広く世の注目を浴びるようになったのは、1970 年代からである (Schreiber, 1977; Mayer, 1978; Sheehy, 1976; Levinson et al., 1978; Gould, 1978; Newman & Newman, 1975; Mankowitz, 1984)。

ここで Erikson について言えば、彼が *Youth: Change and Challenge* (Erikson Ed., 1963) を編集し、さらに、*Identity: Youth and Crisis* (Erikson, 1968) を出版したのは 1960 年代であるが、1970 年代に入ると、*Adulthood* (Erikson Ed., 1976) を編集・出版している。さらにまた、Erikson も関った *Identity and Adulthood* (Kakar Ed., 1979) が出版されている。なお、年代の

変わり目である1980年には、*Themes of Work and Love in Adulthood* (Smelser & Erikson Eds., 1980) を編集・出版している。[Erikson は、1980年代にはもっぱら老年期の研究を行い、その成果を *Vital Involvement in Old Age* (Erikson et al., 1986) として出版している。よく知られているように、Erikson が家族とともにウイーンからボストンへ移住したのは1933年である。彼はボストンで児童の研究と治療（遊戯療法）を行い、さらに、1938年にはサウスダコタ州のスー族インディアンの子供たちの研究、1939年にサンフランシスコに移ってから児童分析やユーロク族インディアンの子供たちの研究を続け、1950年に *Childhood and Society* を出版、その後、青年期の同一性拡散の臨床像の論文を含む *Identity and the Life Cycle* を1959年に出版した。結局のところ、Erikson の主たる研究対象について言えば、1930年代から1950年代は乳幼児期から学童・青年期、1950年代から1960年代は青年期、1970年代は成人期、1980年代は老年期ということになる。]

上述のように、中年期に関してはいくつかの先行研究があるが、それにしても、中年期においては、自我同一性はいったいどのような様相を呈するのであろうか。後に述べるように、いくつかの研究がなされているし、また、今後も中年期の自我同一性に関する研究は増加していくものと思われる。本稿のねらいは、中年期の自我同一性について、これまでの研究の展望と現況について整理することである。具体的にはまず、中年期に関する Erikson の考え方を自我同一性の観点から整理・明確化し、次に、中年期における自我同一性の諸研究について展望したい。なお、本展望の対象となる論文の著者が(例えば Erikson のように)論文のタイトルや文章の中で成人期という言葉を使用している場合には、その論文の紹介の項では成人期という言葉をもそのまま使用した。また、論文のタイトルに成人期という言葉が用いられていても、研究の対象が20歳代や60歳代、つまり成人期前期や成人期後期の人々になっている場合には、一部を除いて今回の展望から除外した。

II 中年期に関する Erikson の考え方

1 Erikson の発達段階区分

Erikson は1950年にライフサイクル説(人生の8段階説)を提出して以来、長年にわたって内容を吟味・修正しているが、発達段階の区分に関して言えば、彼は中年期という言葉を用いていない。つまり、Erikson の区分では、青年期(adolescence)と成熟期(mature age)との間に、若い成人期(young adult)と成人期(adulthood)の二つが置かれている。[ただし、1976年以降、Erikson は成熟期を老年期(old age)と改め、1982年以降は若い成人期を前成人期(early adulthood)と改めている。]強いて言えば、若い成人期は結婚が問題となる年代なので、20歳代ないし30歳代が相当しよう。そうすると、成人期は30歳代から50歳代もしくは60歳代となり、これが中年期にほぼ相当すると考えられる。[Erikson は中年という言葉をもまったく使わなかった訳ではない。例えば、48歳になった Gandhi を「中年の」(middle aged)と形容し、インドの父として台頭していく Gandhi の最も生産的なこの時期を、「人生の真ん中の時期」(middle span of life)と呼んでいるし(Erikson, 1969)、別の所では、「生殖性対停滞という成人期中期の危機(the middle adult crisis of Generativity vs. Stagnation)」といった表現を用いている(Erikson, 1980)。]

2 成人期の発達課題と危機

若い成人期の発達課題が他人や異性との「親密性 (intimacy)」にあるとすれば、成人期のそれは「生み育てること (generativity)」にある。generativity というのは成人期の発達課題として Erikson 自身が作り出した造語であるが、和訳しにくい。通常は、「生殖性」と訳されている (仁科訳, 1977, 1980; 小此木訳, 1973)。これに対して 鑑 (1983) は、「世代性」という訳語をあてている。いずれにしても、generativity は、基本的には次の世代 (generation) である子どもたちを生み出し (generate)、育て導いていくことに対する深い関心を意味している。しかしそれだけにとどまらず、他人の子どもや同胞、他者をも育て、さらには、新しい思想や作品、物をも産み出すという、成人の側の育成的・創造的・生産的な関り方を意味している。つまり、生殖性 (世代性) とは、大人世代から次世代へと受け継がれていくあらゆるものを育ていこうとする心理的な力であると言ってもよい。

以上を概括すれば、generativity とは、狭義には、性器性 (genitality) と遺伝子 (genes) を介して次の世代を確立しようとする生殖的関心であり (Erikson, 1959)、広義には、子孫を生み出すこと (生殖性) (procreativity)、生産性 (productivity)、創造性 (creativity)、自分自身の更なる同一性の開発に関わる一種の自己生殖 (self-generation) といったもろもろの態勢を包含する概念であり、「世界の維持 (the maintenance of the world)」を目的とするものである (Erikson, 1976, 1980, 1982; Erikson, Erikson & Kivnic, 1986)。

ところで、Erikson (1980) は、生殖性の否定的対応物として、停滞 (stagnation) 以外に自己耽溺 (self-absorption) と拒否性 (rejectivity) の二つを挙げている。成人にとって生殖性の達成を通して自己の成熟過程の促進をはかることは容易ではなく、成人はともすれば停滞感 (内的不活発さ) にとらわれ、ナルシスティックな自己陶醉に陥り、さらには、自分たちに逆らう他の種族 (集団) を拒否 (抑圧・破壊) してしまう。これが、成人期の心理社会的危機の中核である。[危機とは、方向から言えば分岐点であり、心理的に言えば葛藤である。Erikson (1980, 1982) を参照すると、generativity は同調 (調和) 傾向 (syntonic trend) であり、他方、stagnation と self-absorption は失調 (不調和) 傾向 (dystonic trend) である。この、同調傾向と失調傾向の葛藤から生まれる (成人期における) 心理社会的強さ (psychosocial strength) は、「世話 (care)」である。そして、世話を協和傾向 (sympathic trend) とすれば、不協和傾向 (antipathic trend) が拒否性となる。拒否性とは、特定の人や集団を自己の生殖的関心の中にも含めることに対する嫌悪であり、より簡単に言えば、他者の世話をしたくないということである。]

3 自我同一性の観点から見た Erikson の成人期論

Erikson の成人期論の中核は、成人期の危機を生殖性 (世代性) 対自己耽溺と停滞 (generativity vs. self-absorption and stagnation) という対立命題とみなし、生殖性の確立を成人期の発達課題とする。このような彼の成人期論は、自我同一性とどのような関係を有しているのだろうか。

まず第1は、生殖性の問題である。生殖性は基本的には他者に対する育成的関心を意味しているが、上で触れたように、生殖性の中には自己生殖が含まれている。この自己生殖とは、文字通り自分自身に対する生殖的関りである。ひらたく言えば、若い成人期までの「自分」を変容させようとする態勢である。理論的に言っても、成人期において他者を育もうとする「自分」になるには、まず、それまでの「自分」が変容する必要がある。

第2は、成人期における同一性形成の可否の問題である。青年期の発達課題であった自我同一性の確立は、青年期だけで終了するものではない。若い成人期の親密性の確立、成人期の生殖性

の確立を経由して、老人期の統合 (integrity) へと至る。[統合は自我の総合であり、同一性形成のいわば総仕上げである。狭義には、全体性を維持するのに必要な力と決意を統合しようとする老いゆく人間の努力を指す (Erikson et al., 1986).] つまり、青年期の実存的な同一性感覚の追求を終えた若い成人たちは、彼らの同一性を他者との相互の親密性の中で融合・共有し、成人期に入ると自己生殖という課題に取り組む中で自分自身の更なる同一性を開発し、老人期に至って同一性の総仕上げを行うことになる。

第3は退行の問題である。成人期においては生殖性と自己耽溺・停滞が相互に葛藤しあう。葛藤はエネルギーを消耗する。人によれば、それも特に自我機能が低下している人の場合には、葛藤を乗り越える方向ではなくて、葛藤によって過去への退行の方向を辿ってしまうことになる。つまり、成人期における葛藤によって、若い成人期における親密性対孤立の葛藤や、青年期における同一性対同一性の拡散 (混乱) の葛藤が再燃してしまうことになる。

第4は擬似種族化 (pseudo-speciation) の問題である。成人期において、擬似種族化は拒否性と結びつき、例えば他の集団との戦争といった形で、周期的かつ集団的に顕在化する可能性がある (Erikson, 1982)。しかしながら、この擬似種族化は、他集団の同一性を拒否する反面、それと敵対する集団に属する各成員たちに確固たる集団同一性を付与するという肯定的・協和的な側面を有していよう。

Erikson 自身は成人期における自我同一性について何らまとまった論考を発表していない。ましてや、近年 Marcia et al. (1993) や岡本 (1994a) が試みているような成人期における自我同一性の諸様態については言及もしていない。しかしながら、彼の考え方に立脚して、成人期の同一性問題を検討すれば、以上のようなだろう。ポイントは、自己生殖 (self-generation) (Erikson, 1982) という言葉にあるように思える。ここには、他者の世話ではなくて、自分の世話、自分自身の育成といったニュアンスが強く含まれているからである。

III 中年期の自我同一性に関する研究

1 同一性の測定方法

Erikson により「同一性は生涯続く問題」とされながらも、青年期以降の同一性研究が近年まで未開拓であった一因には、成人期用の同一性測定方法が開発されていなかったことがあげられよう。近年進められつつある成人期の同一性研究では、測定方法として、(1) Erikson の epigenetic schema (漸成図式) 上の最初の6段階までを対象としていたものを最終的な8段階まで拡張させた質問紙、(2) 成人期の時点での同一性感覚を問う質問紙、(3) 成人期用の同一性地位面接あるいは同一性地位質問紙などが用いられている。(1) には、Boylin et al. (1976) が Constantinople (1969) の尺度を拡張させた E-IPD (Expanded version of the Inventory of Psychosocial Development), Darling-Fisher et al. (1988) が Rosenthal et al. (1981) の尺度を拡張させた MEPSI (Modified Erikson Psychosocial Stage Inventory), 中西・佐方 (1993) が Rosenthal et al. (1981) の尺度を拡張させた再改訂 EPSI (エリクソン心理社会的段階目録検査) などがある。その他、漸成図式の全段階を検証するものとしては、Ochse, et al. (1986) の ES (Erikson Subscale) や, Domino et al. (1990) の IPB (Inventory of Psychosocial Balance) などがある。また、岡本・山本 (1985) は、図式の全段階に対応させた自我同一性 SCT を考案している。(2) は、Dignan (1965) が青年期用に開発した同一性感覚を問う質問紙に修正を加えた質問紙などである。(3) に関しては7節

の同一性地位において述べる。

2 同一性発達理論

同一性に関しては、「結果かプロセスか」という重要な論議がある。これに関し、Brim (1976), Gergen (1977), Zurcher (1977)などは早くから、成人の同一性を継続した変化プロセスとみる見方を提唱している。また、Marcia (1976)による「青年期の同一性地位は成人期への移行期にあたって変動しやすい」との指摘をうけ、Whitbourne & Weinstock (1979)やWaterman (1982)も同一性地位発達プロセスを図式化している。具体的に言えば、Whitbourne & Weinstockは、(1) 同一性と経験をめぐる帰納的分化と演繹的分化の円環モデルと、(2) 潜在的な危機事態に対する個人の対処スタイルと4つの同一性地位との組み合わせより成る同一性危機解決ステップモデルを提出している。さらにWhitbourne (1986a)は、前記の円環モデルを発展させ、個人と、個人の経験間の相互作用を、Piaget et al. (1969)のassimilation (同化)とaccommodation (調整)と関連づけて論じている。

Stephen et al. (1992), Marcia (1993)は、最初の同一性解決期である青年期に、同一性を達成し得た人々の多くは、生涯にわたりさらなるMoratorium-Achievement Moratorium-Achievement (MAMA) cyclesを経験していくが、その一方で早期完了地位と拡散地位の人々のMAMA cyclesは存在するにしても弱いものでしかないという説を述べている。なお、Stephen et al. (1992)は、生涯にわたる同一性発達を予測する変数として、論理的な変数と経験的な変数という2つのものを提案している。

武則 (1980ab, 1982ab), 岡本 (旧姓武則) (1985, 1986, 1987, 1991ab, 1992, 1994ab)は、一連の成人期における同一性研究に取り組んでおり、岡本 (1994a)において集大成されている。岡本は、中年期の同一性危機は、(1) 心身感覚の変化に伴う危機期、(2) 自己の再吟味と再方向づけへの模索期、(3) 軌道修正・軌道転換期、(4) 同一性再確立期というプロセスを経て再体制化されていくとしている。さらに彼女は一連の研究から、青年期に獲得された同一性は、中年期および定年退職期に再び危機を迎え、再吟味と再方向づけがなされ、それぞれにおいて再度同一性が達成されるとし(再生同一性, renewed identity), 最終的に、成人の同一性発達プロセスに関して、従来言われているような階段状モデルに替えて、ラセン式発達モデルを提唱している。

3 年齢と同一性の関係

Waterman (1982)は、成人期を青年期に獲得した同一性を強化していく時期ととらえている。ただし彼 (1993)は、成人期にも新たな同一性問題が出現するとして前説を修正している。このように、同一性発達に関しては、彼が当初考えたような、人は歳を重ねると共に、青年期に獲得した同一性を増強していくという見解と、成人期にも独自の同一性発達プロセスが存在するという見解がある。

結論的に言えば、こうした加齢と同一性発達との関係についての一定した結果は、これまでの実証的研究からは得られていない。まず、加齢と共に同一性が高まるという見解を示すものとしては、Whitbourne & Waterman (1979), Whitbourne et al. (1992)の、それぞれIPD, E-IPDを用いた研究がある。Freilino et al. (1985), Archer (1985), Owens et al. (1987)も、女性における同一性は一般に年齢と共に増大すると結論づけている(Waterman, 1993)。また、Mallory (1983), Kroger et al. (1991)は、地位的アプローチの結果、成人期段階における達成地位への移行を報告している(Waterman, 1993)。つまりMalloryは、30歳代と40歳代に達成地位への大

きな移行があることを報告し、Kroger et al. も、性別や教育の程度、職業上の地位などによって差はあるが、成人期を通じ、総じて達成地位へと至る傾向が見いだせると報告している。石谷（1991, 1993）も同一性感覚の検討から成人期における同一性発達を支持しており、併せて同一性の質的変容も示唆している。一方、年齢と同一性発達間に関連性はみられないとする研究としては、Tesch（1985）のE-IPDを用いた研究や、Archer et al.（1988）の研究があげられる。

以上の研究を概観すると、成人期の同一性発達に関しては、加齢に伴う一般的傾向に加えて、個別的な要因が複雑にからんでくるように思われる。その点において、McAdams et al.（1986）が中年期の特徴の一つとしてあげている、「個人をとりまく諸要因の複雑性 (complexity)」という視点が重要となってくると思われる。

4 同一性発達に関する要因

何が同一性発達上の差異をもたらすのか、つまり同一性発達の先行要因は何なのかという問題の解明が、今後の重要な課題として残されていると思われる。Whitbourne（1986b）は、経験への開示性 (openness to experience)、つまり新しい経験に対して開かれていることが、成人の同一性の柔軟性 (identity flexibility) を予測すると述べている。[identity flexibility とは、Grotevant et al.（1982）によれば、「人生変化への柔軟な準備状態」とされている。] Tesch et al.（1987）も、経験への開示性が成人の同一性発達を促すと述べており、このことを、Rogers（1961）の「ポジティブなパーソナリティ成長には開示性が必要」とする説を支持するものとしてとらえている。後述する園田・中釜（1990）、中釜・園田（1990）も、同一性発達の差異を生む要因として、経験への開示性と青年期以前の発達課題達成の差異をあげており、岡本（1992）も、成人期の同一性成熟に関する要因として、成人期以前の発達課題の達成度や自我機能の高さ、心理的危機に際しての主体的模索といったものをあげている。

5 女性の同一性

女性の同一性問題に関しては、従来から「Erikson 理論は本来、男性をモデルとして展開されており、女性には当てはまりにくい」という指摘がなされている。無藤（1987）は、これまでの性差をめぐる論点を、(1) 女性においては、性の領域の関与が大きいのではないかと、(2) 女性の同一性は、危機を経たか否かより、何ものかへの強い傾倒による安定に基づいているのではないかと、(3) 女性では、同一性の課題と親密性の課題は平行して進むか、もしくは親密性の課題が同一性の課題に先立つのではないかとという3点にまとめている。こうした同一性をめぐる性差の検討は、主として青年期後期を中心に進められてきているが、千原（1990）は、青年期後期から成人期への移行期（20 から 35 歳）の同一性感覚を、Dignan（1965）を参考とした質問紙で検討し、自己感覚、独自性などの項目に性差がみられたとして、青年期以降の同一性においても性差が存在することを示唆している。

このような性差に加え、成人期の女性をめぐるのは、結婚や出産、育児、母親役割の終了、更年期の問題など、女性特有の問題も多く、加えて今日の社会情勢の変化は、女性の生き方に多様化をもたらしている。こうした中で、成人期女性の同一性に焦点を当てた研究も次第に進められつつある。

まず、女性の生き方に関して常にとりざたされる、「家庭か仕事か」という問題がある。成人期女性の同一性研究においても、専業主婦と有職女性の同一性の比較という形をとる研究が最も多いようである。これまでの研究では、女性の同一性発達を促す要因として、職業の果たす役割が

大きいと結論づけた研究が多いが (O'Connell, 1976; 岡本, 1987, 1991b; 堀内, 1990, 1993; 杉村, 1993), 太田 (1990) により, 育児体験も同一性発達に寄与するという報告がなされている。[太田は, Rasmussen (1961) の拡張版を作成し, 結婚後の生活により generativity の増加がみられたことから, 育児体験が同一性発達に寄与することを示唆する結果として報告している。ただし, 同一性得点や全体得点では部分的にしか有意差が得られておらず, やや論拠の弱さを残している。] この問題に関し, 岡本 (1987) は, 「相互性 (mutuality) の観点からも, 育児体験は母親の同一性に寄与すると考えられるが, こうした側面は質問紙レベルではあらわれにくく, より個人の内面に接近できる面接法を用いる必要があるのではないか」と述べており, 今後のさらなる検討課題と言えよう。また, 堀内, 杉村 (旧姓堀内) は, 有職女性という観点に関し, その職種を検討する必要性を指摘しているが, このようなより綿密な比較検討も今後は必要となつてこよう。なお, 堀内, 杉村は, 社会的同一性 (有職者にとっての職業を基盤とした職業的同一性, 専業主婦にとっての家庭役割を基盤とした家庭的同一性) と, 個人的同一性 (O'Connell, 1976 による, 社会的役割の反映ではない, 自己定義に基づいた, より個別的な同一性) というとらえ方に基づいた考察を行っているが, こうした視点もまた重要と思われる。

専業主婦の同一性と, 成人期に大学などで勉学を再開した女性の同一性の比較研究も行われており, その結果から Amstey (1977), Luria (1981), Archer et al. (1988) は, 主婦群には早期完了か拡散が多く, 勉学という形で新たな行動を始めた女性群には達成やモラトリウムが多いと報告している (Marcia, 1993)。なお, Caracelli (1988) は, 再入学した女性の同一性地位の変化を追った研究から, 達成地位の増加や早期完了地位の減少を報告している (Waterman, 1993)。

次に, 子育て後の「空の巣 (empty nest)」といわれる状態, つまり, 母親役割の終了に伴う対象喪失の状態と同一性との関係に言及した研究としては, Shainess (1977), Ellett (1982) があげられる。Shainess は, 臨床経験の考察から対象喪失という心理的危機が, 自己同一性への脅威をもたらすことを指摘しており, Ellett は, 母親役割の喪失と同一性・自己評価の関係を検討した結果, すべての調査対象者が母親役割の喪失の結果として同一性危機を体験し, 自己評価を低下させていたと述べている。

更年期に関する近年のとらえ方としては, 従来の否定的なとらえ方から, あまり重要な問題ではないとする立場や, ある種の開放感をも含む肯定的なとらえ方へと変化しつつある。こうした中で更年期と同一性の関係に言及したものとして, 北村・篠置 (1992) は, 更年期症状が自覚され始める時期は, 同一性における中年期危機が問題とされる時期とほぼ一致し, これまでの同一性 (青年期後期に確立されて, 成人期前期の発達課題や生活構造の基盤となっていたもの) の問い直しを迫られる時期と重なる形で, 女性としての自己への同一視が揺らぎ始めることを指摘している。

園田・中釜 (1989ab, 1990), 中釜・園田 (1989ab, 1990) は, 青年期後期から成人期にかけての移行期の女性 (30 歳代前半) を対象に一連の研究を進めており, その結果から, 「女性が同一性獲得の課題を 20 歳代前半で解決することは, 価値観が多様化した現代にあっては問題を早々に切り上げる早期完了的要素を伴う」とし, 「20~30 歳代を通して十分なモラトリウムを踏まえた上で同一性を達成していく過程」を女性の同一性発達モデルとして提示している。

森本 (1992ab) は, 回想法を用い, 青年期から中年期までの同一性発達経路を検討する面接を行っている。中年期女性の同一性に関しては, (1) 同一性再編成過程のどの段階にあるか, (2) どの程度危機や模索・試行錯誤へ主体的に取り組んでいるかにより, 同一性の再編成, モラトリウム, 同一性の安定・拡大, 予定同一性 (foreclosure) の安定, 危機後拡散という 5 つの状態に分

類している。[foreclosure に関しては、森本では予定同一性と訳されているが、その他、早期完了（村瀬，1972），打ち切り（加藤，1978），アイデンティティ拘束（西平，1979），権威受容（加藤，1983），早産（鑑他編，1984）などと訳されている。われわれとしては、受動的達成という用語を提案したい。] 森本はまた、先行研究では、30歳前後から30歳代半ばまでの時期は同一性の安定と根付きの時期とされていたが、森本の研究においては、30歳代前半から新たな役割を求め同一性の再編成が行われていたことを報告している。

松下他（1991，1992），国眼他（1987，1993）は一連の女性のライフサイクルに関する研究を行っているが、その中で、30歳代前半の専業主婦に関しては「自分を見失ってしまうのではないか」という同一性危機が存在することを指摘しており、併せて就業体験が女性の自己意識に与える影響の大きさを評価している。岡本・松下編（1994）においては、それぞれの一連の研究が女性のライフサイクルという視点から集大成されている。

6 時間的展望と同一性

時間的展望と同一性の関係を検討したのものとして、五十嵐（1989），白井（1991，1993）がある。五十嵐は、前成人期に時間的展望の混乱がみられ、あらためて自己の人生を問い直す姿勢の一端がみられると述べている。また白井は、中年期において、時間的信念（時間的展望に対する個人の信念）と時間的展望感覚の関連はより強まると述べており、このことを、岡本（1985）による「中年期は時間的展望がせばまり自我同一性の危機に直面する時期である」との説を示持する結果としてとらえている。併せて白井は、中年期における同一性達成地位の人々は、拡散地位の人々に比べて肯定的な時間的展望をもつと報告している。

7 同一性地位

同一性地位面接は、当初 Marcia（1966）によって青年期用に考案されたものであるが、成人期の同一性研究への適用に際し、特に危機のとりえ方に関して成人期に対応させた視点が導入されている。具体的に言えば、危機を「これまでの価値観や考え方の枠組みを変更したり拡大したりすることを要求する状況や事態に出会い、主体的にそれを引き受けて枠組みの拡大や再編成の作業を経たこと、および受け入れる姿勢を有していること（園田・中釜，1989ab，1990；中釜・園田，1989ab，1990）」と定義しており、同様の定義に基づいた研究が進められつつある（武則，1980ab，1982ab；岡本，1985，1986，1987，1991ab，1992，1994ab；森本，1992ab；堀内 1990，1993；杉村，1993）。

Marcia et al.（1993）では、青年期早期・中期，青年期後期，成人期それぞれに章を設けて、同一性地位判定基準が論考されている。その中で Waterman（1993）は、被験者の年齢に応じた適切な同一性地位決定が行われる必要性を強調している。彼はまた、成人用の同一性地位判定に関し、(1) 面接時間は、考え方や経験範囲の複雑さの増大から1時間から2時間を要する（高校生は20から30分，大学生は45分から1時間），(2) 成人は同一性選択の結果として生活しており，それがよい結果を伴わないときには，情動的に中年期危機を経験するため，危機の程度が幻滅の反映としての情動的なものなのか，それとも新しい同一性選択に向けた努力を含んだ，真の同一性危機であるのかを見極めねばならない，(3) 同一性選択の変更は，配偶者や子どもに関っていくこととなり，このことは同一性選択変更を妨げる場合もあれば，促す場合もある，(4) 過去の記憶の正確さに基づいて判定される結果，達成地位は過小に評価される可能性が高くなるなどの点を指摘している。また，Waterman et al.（1993）は，成人の同一性地位判定基準を，exploration（探

索)と commitment (傾倒)のそれぞれについて具体的に解説している。[Matteson (1977)は crisis という用語に変えて, exploration という用語を提案しており, Marcia 自身も後にこれに従っている。]その中で探索に関しては, 経験した時期に応じた判定基準が適用されるべきであるが, その体験が現在の個人の目標や価値観, 信念に結び付いたものであれば, どの年代の経験であれ, 同一性形成過程としては同様と見なされ, 地位判定の対象としてとらえるべきであると述べている。また, 彼らは, 成人としての対象年齢を, 20 歳代の半ばから 50 歳代後半もしくは 60 歳代前半までにしているが, 35 年あまりもの期間は 1 つの判定マニュアルで扱うにはあまりにも広すぎ, 将来的にはもっと区分されるであろうとのコメントも残している。

その他, 成人期における各同一性地位の特徴に言及した研究として, Marcia et al. (1980), Malin (1982) があり, 各同一性地位の比較や変化率を検討した研究として, Josselson (1987, 1988), Kroger (1986, 1988), Kroger et al. (1987) などがある。

8 多重同一性 (multiple identities)

Thoits (1983, 1986) は, 個人が社会の中でもつ役割に代表される同一性 (role-identity) の数と, 心理的健康度との関係性を検討している。その結果, Thoits は, 複数の役割同一性をもっていることが心理的健康度に寄与することを見いだしている。この multiple identities という概念は, 多くの役割の統合が重要課題となってくると思われる女性に関して, より必要な視点と思われる。[その点で 5 の女性の同一性の節とも関連してくることとなる。] なお, Hornstein (1986) は, multiple identities という言葉こそ用いていないが, Thoits と同様の視点から中年女性を対象に, 複数の役割への参入度と心理的安定度との関係を検討している。具体的に言えば, 仕事・母親・妻・ボランティア活動・自己表現活動 (絵画・瞑想など) という 5 つの活動への参入度と同一性との関係性を検討しており, その結果から, (1) 仕事への参入度の低い女性では母・妻・ボランティア活動という伝統的な活動に対し強い役割志向と満足を示し, 安定した同一性を示す, (2) 仕事への参入度が低い状態から高い状態に移った群では, 当初 (1) と類似の役割志向を示すが, 仕事への参入度の高まりに伴い, 同一性の再構成性は高まる, (3) 多くの役割をうまく統合している群は, 早くから安定した同一性を示すことなどを見いだしている。

IV おわりに

Erikson が 1950 年前後に青年期における自我同一性の形成, それも心理社会的な同一性の形成という, それまでになかった新鮮な考え方を提唱して以来, 同一性はこれまでもっぱら青年期の問題とされ, 同一性の定義, 同一性の下位概念, 同一性の形成過程, 同一性地位, 同一性と病理との関係 (特に同一性の拡散・混乱と精神病理との関係), 心理療法における同一性抵抗, 否定的同一性や対抗同一性の問題, 同一性感覚の測定尺度などについて膨大な研究がなされてきた。しかしながら, 1970 年代に入って, 当初は中年期の危機という精神保健上の問題として, やがては, 成人期における自我同一性そのものの問題として種々の論議がなされはじめたのである。

成人期における同一性の研究は, 本展望に見られるように多岐にわたっている。各テーマをかいつまんで言えば, 同一性の測定方法, 同一性の発達 (青年期から成人期初期を経て成人期中期へと至る移行過程における同一性の変動性と, 成人期中期それ自体の中における同一性の変動性), 加齢と同一性の発達との関連性, 同一性発達の先行要因, 中年期女性の同一性, 時間的展望

と同一性との関連性, 同一性地位, 多重同一性などである。これらについてはそれぞれ, いくつかの調査研究や論考がなされているが, 問題点も多く, 相互に矛盾する結果が出ていることもある。ともあれ, これらのテーマは今後の諸研究の進展とともに新たな知見が得られていくものと思える。

本稿では, 中年期に関する Erikson 理論の再検討と, 中年期の同一性研究についての展望をおこなった。青年から成人, 成人から老人への移行期の問題, 中年期における性別同一性の問題などについては稿を改めたい。

[謝辞: 資料整理にあたって熊本大学教育学部大学院生の今村正作・佐藤直子両氏の協力を得ました。ここに記して深謝いたします。]

引用文献

- Archer, S. L. (1985) : Career and family : The identity process for adolescent girls. *Youth and Society*, 16, 289-314.
- Archer, S. L., Waterman, A. S. & Owens, P. O. (1988) : Women's identity : Comparison among three patterns of life activities. Paper presented at the meeting of the Association for Women in Psychology, Bethesda.
- Boylin, W., Gordon, S. K. & Nehrke, M. (1976) : Reminiscing and ego integrity in institutionalized elderly males. *Gerontologist*, 2, 118-124.
- Brim, O. G. (1976) : Life-span development of the theory of oneself : Implications for child development. In H. Reese (Ed.), *Advances in Child Development and Behavior*, Vol. 11, New York : Academic Press, 241-251.
- Bühler, C. & Massarik, F. (Eds.) (1968) : *The Course of Human Life*. New York : Springer.
- Constantinople, A. (1969) : An Eriksonian measure of personality development in college students. *Dev. Psychol.*, 1 : 4, 357-372.
- Darling-Fisher, C. S. & Leidy, N. K. (1988) : Measuring Eriksonian development in the adult : The modified Erikson psychosocial stage inventory. *Psychol. Rep.*, 62, 747-754.
- Dignan, M. H. (1965) : Ego identity and maternal identification. *J. Personal. Soc. Psychol.*, 1 : 5, 476-483.
- Domino, G. & Affonso, D. D. (1990) : A personality measure of Erikson's life stages : The inventory of psychosocial balance. *J. Personal. Assess.*, 54, 576-588.
- Ellett, S. E. (1982) : An investigation of identity and self-esteem in traditional married women during their middle years, and the impacts of the life planning seminar. *Diss. Abst. Int.*, 42 (7-B), 2969-2970.
- Erikson, E. H. (1950) : *Childhood and Society*. New York : W. W. Norton.
- Erikson, E. H. (1959) : *Identity and the Life Cycle*. Selected Papers. With a Historical Introduction by David Rapaport. *Psychol. Issues*, Vol. 1, No. 1. New York : International Universities Press. (小此木啓吾訳編, 1973, 自我同一性 アイデンティティとライフサイクル, 誠信書房)
- Erikson, E. H. (1963) : *Childhood and Society*. Second Edition. New York : W. W. Norton. (仁科弥生訳, 1977, 1980, 幼児期と社会 I・II, みすず書房)
- Erikson, E. H. (Ed.) (1963) : *Youth : Change and Challenge*. New York : Basic Books.
- Erikson, E. H. (1968) : *Identity : Youth and Crisis*. New York : W. W. Norton.
- Erikson, E. H. (1969) : *Gandhi's Truth : On the Origins of Militant Nonviolence*. New York : W. W. Norton. (星野美賀子訳, 1973, 1974, ガンディーの真理 戦闘的非暴力の起源 1・2, みすず書房)
- Erikson, E. H. (Ed.) (1976) : *Adulthood*. New York : W. W. Norton.
- Erikson, E. H. (1980) : On the generational cycle. *Int. J. Psycho-Anal.*, 61, 213-223.
- Erikson, E. H. (1982) : *The Life Cycle Completed : A Review*. New York : W. W. Norton. (村瀬孝雄・

- 近藤邦夫訳, 1989, ライフサイクル その完結, みすず書房)
- Erikson, E. H., Erikson, J. M. & Kivnic, H. (1986): *Vital Involvement in Old Age*. New York: W. W. Norton. (朝長正徳・朝長梨枝子訳, 1990, 老年期 生き生きしたかわりあい, みすず書房)
- Erikson, E. H. & Newton, H. P. (1973): *In Search of Common Ground: Conversations with Erik H. Erikson and Huey P. Newton*. Introduced by Kai T. Erikson. New York: W. W. Norton. (近藤邦夫訳, 1975, エリクソン VS ニュートン アイデンティティと革命をめぐる討論, みすず書房)
- Erikson, E. H. (1976): *Reflections on Dr. Borg's Life Cycle*. In E. H. Erikson (Ed.), *Adulthood*, New York: W. W. Norton, 1-31.
- Freilino, M. K. & Hummel, R. (1985): *Achievement and identity in college age vs. adult women students*. *J. Youth and Adoles.*, 14, 1-11.
- Gergen, K. J. (1977): *Stability, change, and chance in understanding human development*. In N. Datan & H. W. Reese (Eds.), *Life-span Developmental Psychology: Dialectical Perspectives on Experimental Reserch*. New York: Academic Press, 135-158.
- Gould, R. L. (1978): *Transformations: Growth and Change in Adult Life*. New York: Simon & Schuster.
- Gross, I. (Ed.) (1956): *Potentialities of Women in the Middle Years*. Lansing: Michigan State University.
- Grotevant, H. D., Thorbecke, W. & Meyer, M. L. (1982): *An extension of Marcia's Identity Status Interview into interpersonal domain*. *J. Youth and Adoles.*, 11, 33-47.
- 堀内和美 (1990): 中年期女性の自我同一性に関する研究—同一性変化の特徴の分析を中心に— 日本教育心理学会第 32 回総会発表論文集, 119
- 堀内和美 (1993): 中年期女性が報告する自我同一性の変化—専業主婦, 看護婦, 小・中学校教師の比較— 教育心理学研究, 41: 1, 11-21
- Hornstein, G. A. (1986): *The structuring of identity among midlife women as a function of their degree of involvement in employment*. *J. Personal.*, 54: 3, 551-575.
- 五十嵐敦 (1989): 時間的展望と同一性混乱の関係について—青年期から成人期にかけての比較— 日本教育心理学会第 31 回総会発表論文集, 229
- 飯田真 (編) (1990): 中年期の精神医学 医学書院
- 石谷真一 (1991): 青年期後期から成人期にかけての日本人男性の同一性と親密性 日本教育心理学会第 33 回総会発表論文集, 315-316
- 石谷真一 (1993): 日本における男性の同一性形成の諸タイプについて 京都大学教育学部紀要, 39, 290-302
- Josselson, R. L. (1987): *Identity diffusion: A long-term follow-up*. *Adolescent Psychiatry*, 14, 230-258.
- Josselson, R. L. (1988): *Finding Herself: Pathways of Identity Development in Women*. New York: Jossey-Bass.
- Jung, C. G. (1931): *The stages of life*. *CW.*, 8, 387-403.
- Jung, C. G. (1943): *On the Psychology of the Unconscious*. Fifth Edition. *CW.*, 7, 3-119.
- Kakar, S. (Ed.) (1979): *Identity and Adulthood*. With an Introductory Lecture by Erik H. Erikson. Oxford: Oxford University Press.
- 加藤厚 (1983): 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究, 31, 292-302
- 加藤隆勝 (1978): 自己意識の発達に関する研究の現状と課題 東京教育大学教育学部紀要, 第 1 部, 24, 117-124
- 北村容子・篠置昭男 (1992): 女性のライフ・タスクに関する研究 1—更年期の自我同一性再構成に関する一研究— 日本教育心理学会第 34 回総会発表論文集, 202
- 国眼真理子・松下美知子・西村智子・藤原喜悦 (1987): 女性のライフサイクルに関する研究 日本教育心理学会第 29 回総会発表論文集, 484-485
- 国眼真理子・松下美知子 (1993): 女性のライフサイクルに関する研究—青年期後期から成人期における職業意識をめぐって— 日本教育心理学会第 35 回総会発表論文集, 332
- Kroger, J. (1986): *The relative importance of identity status interview components: Replication and extention*. *J. Adoles.*, 9, 337-354.
- Kroger, J. (1988): *A longitudinal study of ego identity status interview domains*. *J. Adoles.*, 11, 49-64.
- Kroger, J. & Haslett, S. J. (1987): *A retrospective study of ego identity status change by mid-life adult*.

- Social and Behavioral Sciences Documents, 17 (Ms. No. 2797).
- Levinson, D. J., Darrow, C. N., Klein, E. B., Levinson, M. H. & McKee, B. (1978) : The Seasons of a Man's Life. New York : Alfred A. Knopf. (南博訳, 1980, 人生の四季 中年をいかに生きるか, 講談社)
- Luria, E. S. (1981) : Housewives who begin professional school and housewives who do not : Identity and intimacy issues. Diss. Abst. Int., 41 (7-B), 2769-2770.
- Malin, S. Z. (1982) : Ego identity status and second adult life structure in middle aged men and women. Diss. Abst. Int., 43 (3-B), 876.
- Mankowitz, A. (1984) : Change of Life: A Psychological Study of Dreams and the Menopause. Toront : Inner City Books. (三木アヤ監訳, 1986, 更年期と個性化 夢分析を通して, 創元社)
- Mann, C. H. (1985) : Adult development : Individuation, separation and the role of reality. Contemporary Psychoanal., 21 : 2, 284-296.
- Marcia, J. E. (1966) : Development and validation of ego identity status. J. Personal. Soc. Psychol., 3 : 5, 551-558.
- Marcia, J. E. (1976) : Identity six years after : A follow-up study. J. Youth and Adoles., 5 : 2, 145-160.
- Marcia, J. E. (1993) : The status of the statuses : Research review. In J. E. Marcia, et al., Ego Identity : A Handbook for Psychosocial Research. New York : Springer-Verlag, 22-41.
- Marcia, J. E. & Miller, E. C. (1980) : Ego identity in mature women. Paper presented at the meeting of the Eastern Psychological Association, Hartford, CT.
- Marcia, J. E., Waterman, A. S., Matteson, D. R., Archer, S. L. & Orlofsky, J. L. (1993) : Ego Identity : A Handbook for Psychosocial Research. New York : Springer-Verlag.
- Matteson, D. R. (1977) : Exploration and commitment : Sex differences and methodological problems in the use of identity status categories. J. Youth and Adoles., 6, 353-374.
- 松下美知子・国眼真理子・西村智子・藤原喜悦 (1991) : 女性のライフサイクルに関する研究 日本教育心理学会第 33 回総会発表論文集, 495-496
- 松下美知子・国眼真理子・西村智子・藤原喜悦 (1992) : 女性のライフサイクルに関する研究 日本教育心理学会第 34 回総会発表論文集, 200
- Mayer, N. (1978) : The Male Mid-Life Crisis. New York : Doubleday & Company. (山崎武也訳, 1980, 男性中年期, サイマル出版会)
- McAdams, D. P., Ruetzel, K. & Foley, J. (1986) : Complexity and Generativity at midlife : Relations among social motives, ego development, and adults' plans for the future. J. Personal. Soc. Psychol., 50 : 4, 800-807.
- 森本千加子 (1992a) : 中年女性の自我同一性に関する一研究—世代性 (Generativity) との関連からの検討— 広島大学大学院教育学研究科修士論文抄, 64-66
- 森本千加子 (1992b) : 中年女性の自我同一性に関する一研究 (II) —青年期から中年期までの自我同一性発達経路の分析から— 中国四国心理学会論文集, 25, 112
- 村瀬孝雄 (1972) : 青年期的人格形成の理論的問題 教育心理学研究, 20, 46-52
- 無藤清子 (1987) : 自我同一性 (原野広太郎・小嶋秀夫・無藤隆・高橋恵子・湯川良三編, 児童心理学の進歩 16, 金子書房, 197-224)
- 名島潤慈 (1981) : 宗教の機能的側面について (1) —アイデンティティ葛藤にあるある分裂病的青年のケース分析 日本教育心理学会第 23 回総会発表論文集, 460-461
- 名島潤慈 (1984) : 成人期 (安藤延男・村田豊久編, これからの精神衛生, ナカニシヤ出版, 84-94)
- 名島潤慈 (1989) : 夢の中の死 青年期の同一性危機事例の検討 熊本大学教育学部紀要, 人文科学, 第 38 号, 251-256
- 中釜洋子・園田雅代 (1989a) : 青年期後期から成人期にかけての女性の自我同一性発達に関する縦断的研究 II 発達経路の検討 日本教育心理学会第 31 回総会発表論文集, 223
- 中釜洋子・園田雅代 (1989b) : 青年期後期から成人期にかけての女性の自我同一性発達に関する縦断的研究 IV 青年期 F 群のその後の同一性変化の再検討 日本心理学会第 53 回総会発表論文集, 170
- 中釜洋子・園田雅代 (1990) : 青年期後期から成人期にかけての女性の自我同一性発達に関する縦断的研究 V 転機・クライシスを中心にした内容分析 日本心理学会第 54 回総会発表論文集, 153
- 中西信男・佐方哲彦 (1993) : EPSI エリクソン心理社会的段階目録検査 (上里一郎監修, 心理アセスメントハンドブック, 西村書店, 419-431)

- Neugarten, B. L. (Ed.) (1968): *Middle Age and Aging: A Reader in Social Psychology*. Chicago: University of Chicago Press.
- Newman, B. M. & Newman, P. R. (1975): *Development through Life: A Psychosocial Approach*. Ill.: Dorsey. (福富護・伊藤恭子訳, 1980, 生涯発達心理学 エリクソンによる人間の一生とその可能性, 川島書店)
- Newman, B. M. & Newman, P. R. (1984): *Development through Life: A Psychosocial Approach*. Third Edition. Ill.: Dorsey. (福富護・伊藤恭子訳, 1988, 新版 生涯発達心理学 エリクソンによる人間の一生とその可能性, 川島書店)
- 西平直喜 (1979): 青年期における発達の特徴と教育 (大田堯編, 子供の発達と教育 6, 岩波書店, 1-56)
- Ochse, R. & Plug, C. (1986): Cross-cultural investigation of the validity of Erikson's theory of personality development. *J. Personal. Soc. Psychol.*, 50, 1240-1252.
- O'Connell, A. N. (1976): The relationship between life style and identity synthesis and resynthesis in traditional, neotraditional, and nontraditional women. *J. Personal.*, 44, 675-688.
- 岡堂哲雄 (1983): 概説 熟年=中高年の心理と危機 (岡堂哲雄編集・解説, 現代のエスプリ No. 192 熟年の危機, 至文堂, 5-21)
- 岡本 (旧姓武則) 祐子 (1985): 中年期の自我同一性に関する研究 教育心理学研究, 33, 295-306
- 岡本祐子 (1986): 成人期における自我同一性ステータスの発達経路の分析 教育心理学研究, 34, 352-358
- 岡本祐子 (1987): 成人女性の自我同一性に関する研究 (1) 一職業・育児への関与と同一性達成の関連性の検討一 日本教育心理学会第 29 回総会発表論文集, 496-497
- 岡本祐子 (1991a): 成人期における自我同一性の発達過程とその要因に関する研究 広島大学学位論文
- 岡本祐子 (1991b): 成人女性の自我同一性発達に関する研究 広島中央女子短期大学紀要, 28, 7-26
- 岡本祐子 (1992): 成人期における自我同一性のラセン式発達モデルの検討 日本教育心理学会第 34 回総会発表論文集, 210
- 岡本祐子 (1994a): 成人期における自我同一性の発達過程とその要因に関する研究 風間書房
- 岡本祐子 (1994b): 生涯発達心理学の動向と展望—成人発達研究を中心に— 教育心理学年報, 33, 132-143
- 岡本祐子・松下美知子 (編) (1994): 女性のためのライフサイクル心理学 福村出版
- 岡本祐子・山本多喜司 (1985): 定年退職期の自我同一性に関する研究 教育心理学研究, 33: 3, 185-194
- 太田亜紀 (1990): 女性の成人期における自我同一性発達に関する研究 日本教育心理学会第 32 回総会発表論文集, 120
- Owen, R. (Ed.) (1967): *Middle Age*. London: British Broadcasting Co.
- Piaget, J. & Inhelder, B. (1969): *The Psychology of the Child*. New York: Basic Books.
- Rasmussen, J. E. (1961): An experimental approach to the concept of ego identity as related to character disorder. *Diss. Abst. Int.*, 22 (5-A), 1911-1912.
- Rogers, C. R. (1961): *On Becoming A Person*. Boston: Houghton Mifflin.
- Rosenthal, D. A., Gurney, R. M. & Moore, S. M. (1981): From trust to intimacy: A new inventory for examining Erikson's stages of psychosocial development. *J. Youth and Adoles.*, 10: 6, 525-537.
- Shainess, N. (1977): Treatment of crisis in the lives of women: Object loss and identity threat. *Amer. J. Psychothe.*, 31, 227-237.
- Sheehy, G. (1976): *Passages: Predictable Crisis of Adult Life*. New York: Dutton. (深沢道子訳, 1978, パッセージ I・II, プレジデント社)
- Schreiber, H. (1977): *Midlife Crisis: Die Krise in der Mitte des Lebens*. München: C. Bertelsmann Verlag. (小川新一訳, 1980, ケース・スタディ 中年, TBS ブリタニカ)
- Smelser, N. J. & Erikson, E. H. (Eds.) (1980): *Themes of Work and Love in Adulthood*. Cambridge: Harvard University Press.
- Soddy, K. (1967): *Men in Middle Life*. London: Tavistock.
- 園田雅代・中釜洋子 (1989a): 青年期後期から成人期にかけての女性の自我同一性発達に関する縦断的研究 I 9 年間の自我同一性変化について 日本教育心理学会第 31 回総会発表論文集, 222
- 園田雅代・中釜洋子 (1989b): 青年期後期から成人期にかけての女性の自我同一性発達に関する縦断的研究 III 自我同一性地位変化ならびに親密性地位との関連 日本心理学会第 53 回総会発表論文集, 169
- 園田雅代・中釜洋子 (1990): 青年期後期から成人期にかけての女性の自我同一性発達に関する縦断的研究

- VI 不安・自己評価・親密性尺度における同一性群間比較 日本心理学会第 54 回総会発表論文集, 154
- Stephen, J., Fraser, E. & Marcia, J. E. (1992): Moratorium-achievement (MAMA) cycles in lifespan identity development: Value orientations and reasoning system. *J. Adoles.*, 15, 283-300.
- 杉村 (旧姓堀内) 和美 (1993): 現代女性の中年期—アイデンティティの視点から 発達, 54: 14, 37-44
- 白井利明 (1991): 青年期から中年期における時間的展望と時間的信念の関係 心理学研究, 62, 260-263
- 白井利明 (1993): 中年期における自我同一性と時間的展望の関連—青年期との比較における共通性について— 日本心理学会第 57 回大会発表論文集, 40
- 武則祐子 (1980a): 中年期における自我同一性に関する発達危機論的考察 広島大学大学院教育学研究科修士論文集, 140-144
- 武則祐子 (1980b): 中年期における自我同一性に関する研究 (1) —自我同一性展開のプロセスと自我同一性類型— 日本教育心理学会第 22 回総会発表論文集, 206-207
- 武則祐子 (1982a): 成人期の心理・社会的発達に関する研究 (2) —成人期の心理的転換期の検討— 日本心理学会第 46 回大会発表論文集, 233
- 武則祐子 (1982b): 成人の心理・社会的発達に関する研究 (3) —成人期のライフパターンの分析— 広島大学大学院教育学研究科博士課程論文集, 8, 110-117
- 武則祐子・鎌幹八郎・山本力・小柳晴生・磯部修一・小早川久美子・宮下一博・七浦久子・名島潤慈 (1979): 自我同一性に関する研究 (1) -3 自我同一性様態の類型とその特徴 日本教育心理学会第 21 回総会発表論文集, 208-209
- 鎌幹八郎 (1983): 精神分析学派 (三宅和夫・村井潤一・波多野誼余夫・高橋恵子編, 波多野・依田児童心理学ハンドブック, 金子書房, 53-77)
- 鎌幹八郎・名島潤慈・山本力 (1978): 自我同一性に関する研究の現況 日本における研究の展望 広島大学教育学部紀要, 第 1 部, 第 27 号, 137-148
- 鎌幹八郎・山本力・小柳晴生・磯部修一・小早川久美子・武則祐子・宮下一博・七浦久子・名島潤慈 (1979): 自我同一性に関する研究 (1) -1 研究の発展と本研究の位置づけ 日本教育心理学会第 21 回総会発表論文集, 204-205
- 鎌幹八郎・山本力・宮下一博 (編) (1984): 自我同一性研究の展望 ナカニシヤ出版
- Tesch, S. A. (1985): Psychosocial development and subjective well-being in an age cross-section of adults. *Int. J. Aging and Human Dev.*, 21, 109-120.
- Tesch, S. A. & Cameron, K. A. (1987): Openness to experience and development of adult identity. *J. Personal.*, 55: 4, 615-630.
- 千原雅代 (1990): 青年期後期から成人期の自我同一性の性差に関する研究 日本教育心理学会第 32 回総会発表論文集, 245
- Thoits, P. A. (1983): Multipul identities and psychological well-being: A reformulation and test of the social isolation hypothesis. *Amer. Sociol. Rev.*, 48, 174-187.
- Thoits, P. A. (1986): Multipul identities: Examining gender and marital status differences in distress. *Amer. Sociol. Rev.*, 51, 259-272.
- Waterman, A. S. (1982): Identity development from adolescence to adulthood: An extention of theory and a review of research. *Dev. Psychol.*, 18, 341-358.
- Waterman, A. S. (1993): Overview of the identity status scoring criteria. In J. E. Marcia, et al., *Ego Identity: A Handbook for Psychosocial Research*. New York: Springer-Verlag, 156-176.
- Waterman, A. S. & Archer, S. L. (1993): Identity status during the adult years: Scoring criteria. In J. E. Marcia, et al., *Ego Identity: A Handbook for Psychosocial Research*. New York: Springer-Verlag, 241-270.
- Whitbourne, S. K. & Waterman, A. S. (1979): Psychosocial development during the adult years: Age and cohort comparisons. *Dev. Psychol.*, 15: 4, 373-378.
- Whitbourne, S. K. & Weinstock, C. S. (1979): *Adult Development: The Differentiation of Experience*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Whitbourne, S. K. (1986a): *The Me I Know: A Study of Adult Identity*. New York: Springer-Verlag.
- Whitbourne, S. K. (1986b): Openness to experience, identity flexibility, and life change in adults. *J. Personal. Soc. Psychol.*, 50: 1, 163-168.
- Whitbourne, S. K., Zuschlag, M. K., Elliot, L. B. & Waterman, A. S. (1992): Psychosocial development in

adultfood : A 22-year sequential study. *J. Personal. Soc. Psychol.*, 63, 260-271.

山本力・鑪幹八郎・小柳晴生・磯部修一・小早川久美子・武則祐子・宮下一博・七浦久子・名島潤慈 (1979) :
自我同一性に関する研究 (1) -2 自我同一性に関する樹木ダイアグラム 日本教育心理学会第 21 回
総会発表論文集, 206-207

Zurher, L. A. (1977) : *The Mutable Self*. Berverly Hills : Sage.